



# *Fujii Kisen* 藤井規仙の世界

—— 人と陶 つくる喜び 土に生きる ——



# Fuji Kisen

## 焼物とのふれあい

藤井規仙

焼物の町に生まれ育ち、焼物を通じて現在も生活している。まったく自然に……。

私が小学生の頃の海岸には、焼物の燃料として紀州方面からダンベ「百屯程の機帆船」で海を渡って運ばれて来た松の枝葉（以後松葉という）がうず高く積まれ、松葉の大きな山がいくつも並んで居り、私達はその松葉の影に服を脱いで、よく海水浴をしたものです。

ダンベから岸壁に一尺ほどの路板を掛け、仲仕さんがその上をうまくバランスを取りながら石炭を荷揚げしている光景は、海岸へ行けば毎日の様に見られたものですが、今はもう海岸へ行っても、松葉の山も石炭も荷揚げ風景も電気、ガス、重油等、燃料の変化と共に見られなくなってしまいました。

又私が小学校へ通っている頃の行き帰りには、ふた通りの道がありました。昔風に言う往還通りと、もう一つは裏道という狭い路地で、自分の好きな路を勝手に選んで通ったものです。往還通りにも裏道にも一軒ずつ陶器を作っている所（ロクロ成形）があって、よくそこで道草をしたものです。往還通りの方は学校と家とのほぼ中間あたりの所で、大きな木製のロクロのその端にクボミが四個あって、棒をそのクボミにあてがって勢よく廻して急須を作っている。学校の帰りにカバンを掛けた儘で窓硝子に鼻をくっつけてジッとその仕事を見ていると、そのおじさんが大きな目で「ギョロッ」と私を見るとこわくなって逃げ帰ってくる。そして次の日は裏路から帰ることにする。

こちらは家のすぐ近くで少年の頃の記憶では、こちらのロクロは電気で廻っている様だった。大きな土のかたまりをロクロの上に置き、廻転させながら両手でパンパンと土をたたくと、水をつけてたたくから泥水がパッと飛ぶ。そして両腕に力瘤が出来たと思うと土がぐんぐんもり上がって見る見る内に大きな火鉢が出来上がる。

往還通りで硝子窓に鼻をくっつけて見ていた私、そして手ロクロで急須を作っていたおじさんが、なんと初代山田常山さんだったのです。そして路地で火鉢を引いていたおじさんは福田といって今も健在で、この文を書くに当たってお聞きしたのですが、パンパンとたたいて火鉢を作ったロクロの上の土の目方が、なんと六貫目（22.5 kg）尺五の火鉢を一日に百個も作り、尺三の水鉢なら 15 kgの土で百式拾個も引いたというのでびっくり致しました。

又私の家の近所には焼酎瓶を焼く工場が有って出荷前の製品が山と積まれ、その上を怪我もせずに飛び廻って遊び、あたりがすっかり暗くなってから家に帰ったものです。戦争がだんだん激しくなると軍需品の大きさを軍の要求で作っていたのを良く見かけました。甕はあまりに大きいので窯には入り切れず、窯の入口をこわして窯内へ入れているのを見掛けたこともあります。しかし、その甕も終戦後は使い途もなく工場の片隅に放置されて居ましたが、今では歴史的な作品として珍重され常滑市陶磁器会館の前にもすえられて居り、やきもの散歩道の起点ともなっています。

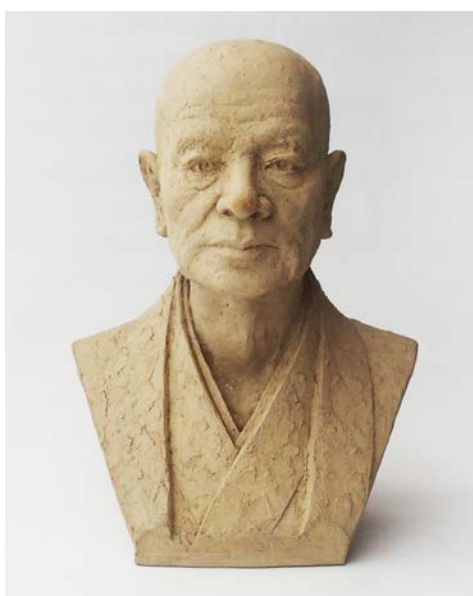
私達の少年時代の常滑は、陶管等の大物が常滑焼の主力製品だった様で、名鉄線の常滑駅から貨車に積み込まれて全国各地に発送されました。終戦後は、時の流れと共に焼物の町も陶管や衛生陶器などの大物から、タイル、植木鉢、煎茶器又は花器、置物等、多岐にわたって推移し個性を生かして現代生活にふさわしい陶器作りに励み、窯の火を絶やすことなく、増々窯業を発展させたいものです。

（※1981年12月『とこしん12月号』を一部修正）





■ 茅葺の家 1980年代



■ 加藤恵昭大和尚胸像 1985年



■ 達磨坐像 1980年頃



■ 風之歌 1990年代



■ 裸婦像 2000年代



■ ミミズクの親子 2004年



■ 黒獅子 1990年代



■ 干支「亥」 1971年



■ 干支「辰」 1988年



■ 蛸 1980年代



■ 規仙人形 1980年代





■ 黒茶碗 1990年代



■ 伊羅保釉秋草紋双耳水指 1990年代



■ 石化粧草紋双耳壺 1990年代



■ 三耳長頸瓶 1990年代



■ 紺釉双兔絵双耳花瓶 1981年  
(藤井吟子作 藤井規仙 施釉)



■ ペンギンの花器 2000年代



■ 三蛙の蓮形花器 2000年代



■ サザエの花器 2010年代



■ 澤瀉絵菓子器 1995年



■ 横行君子の菓子器 1980年代



■ 湯杯 (左: 幸せを呼ぶ左馬 右: 福を呼ぶふぐ) 1998年



■ マングスチンの蓋物 1995年頃





■ おかめとひょっとこ 2010年頃



■ 恵比寿大黒釣舟 1994年



■ 土管坂の陶板 2005年



■ 牡丹紋香炉 1980年代後半



■ 置土瓶 1990年代



■ ネックレスとループタイ 1980年代

人と陶  
つくる喜び  
土に生きる

## 藤井規仙の仕事

藤井規仙（1928 - 2018）は、常滑を代表する名工の一人で、彫刻のやきもの「陶彫」を得意としました。1945年、地元の常滑窯業学校窯業科（現常滑高校）を卒業し、輸出陶器の型をつくる原型師として、市内の製陶所に就職しました。

原型師になったのは、学生時代に東京美術学校（現東京藝術大学）出身の坂田芳信さかたよしのぶに彫刻の指導を受けたことがきっかけでした。藤井は製陶所で、人形や動物、土瓶といった原型をつくる傍ら、『純彫刻』一本の生活をする』という目標を掲げ、卒業後も坂田に教えを乞い、寝食しんしょくも忘れて彫刻に励みました。収入も乏しかった当時、「（生活は）順調ではなかった。でもどうしても彫刻で生きていきたいかった。（自分には）彫刻しかなかったから」と、自分の思いを大切にし、自由に生きることを望みました。

藤井は晩年に「生涯現役がいいね。死ぬ寸前までへらを持って作品をつくっていたい。とにかく彫刻にすがりついていこうと思った」と語っています。その言葉通り、2018年の冬、宮内庁から依頼された植木鉢に貼り付けた龍と鳳凰の装飾が最期の仕事になりました。

藤井の作品には、具象的表現くしやうから抽象的表現ちゆうしやうのもの、ロクロによる仕事のものまでさまざまなものがあります。最も得意とした陶彫の仕事は、実物を見て、触って、つくるという一連の工程があります。藤井は、ものをつくるという行為を通して、人と陶の関係性、土とどのように生きるのかということに常に思考しました。また、子どもたちにもものづくりの楽しさを伝えるため、陶芸を教える活動も長く続けていました。「子どものころに覚えた土の感触は、ずっと忘れない。それが後継者育成の第一歩」が持論でした。常にやきものとともに生きた名工「藤井規仙」の仕事は、今も多くの人の心に息づいています。

（とこなめ陶の森 小栗康寛）



## とこなめ陶の森 陶芸研究所

企画展 藤井規仙の世界

- 人と陶 つくる喜び 土に生きる -

2023年4月22日（土） - 7月17日（月・祝）

■ 織部釉龍鳳凰紋植木鉢 2019年